

現代精神分析における環境的アプローチをめぐる一考察 —システムズアプローチによるコンサルテーションとの比較から—

長谷 綾子

1. 問題提起と目的

昨今、心理士は多様な現場で、その現場に応じたアプローチが求められている。クライアントの家族や所属する組織、地域を対象とするアプローチが求められたり、他職種の専門家と対等に議論しながら協働者となって個人を支援することもある。これらはすなわち、クライアントをとりまく環境を支援したり、セラピスト（支援者）をとりまく環境を活用して支援を行うアプローチと言える。

筆者は精神分析を学びながら、これまで複数の領域で心理臨床経験を重ねてきた。我が国で精神分析と言えば、個別臨床のイメージが強い。しかし現代精神分析においては、個人だけでなく環境を支援するアプローチが存在する。筆者は経験を積む中で、次第にクライアントや自身を取りまく環境に着目し、それを実践に生かすことについて考えるようになった。その経験の一端をここに呈示する。

筆者がまだ心理臨床家として初心者頃、ある児童福祉施設にとって初めての心理士として入職した。筆者がスタッフとの関係やセラピーの行き詰まりに苦悩していたある日、女性スタッフ向けの研修を依頼された。そこで筆者は Winnicott, D.W.の論文（1949/2005）をもとに、施設スタッフが子どもによって掻き立てられる憎しみや、スタッフ自身へのケアの必要性について話した。その時、気が付くと殆どのスタッフの目に涙が溢れていた。筆者はここで初めて、筆者以上にスタッフたちが日々、怒りや憎しみに対峙し、苦痛に耐えていることを想った。そして、自分自身が身を置いている施設そのものの特性やスタッフの情緒について真摯に考え、同時に自身の身が置かれている状況と、セラピーの行き詰まりとの関連について考えた。それを契機に真の意味での協働がはじまり、子どもの内的世界の理解がより深まっていった。同時に行き詰っていたセラピーは動き出し、展開がみられた。

この経験から筆者は、自身が勤める環境（職場）の特性を苦痛や怒りといった無意識的情緒を通じて理解し、その苦痛を交えながら環境と交流することの意義を実感した。

ところで個人と環境との相互作用に着目するアプローチと言えば、コミュニティアプローチや家族療法のシステムズアプローチがある。私はかねてより精神分析的な環境へのはたらきかけが、これらアプローチと実践上、どのような違いとなって現れるのかという点に関心を抱いてきた。しかしこれらを比較検討している研究は、筆者が知る限りでは見当たらない。

本研究では個人を取りまく環境にはたらきかける支援や、もしくは環境を活用して行う支援のことを環境的アプローチと呼び、研究の対象とする。ここで言う「環境」とは、先に呈示した筆者の経験のように、単に外的に実在するものを指すのではなく、個人の内的世界が投影されている意味を含む²⁾。本稿ではまず、精神分析における環境の取り扱いについて歴史の変遷を整理し、近年の動向を概観する。さらに個人と環境との相互作用に着目する家族療法のシステムズアプローチを取りあげ、概念整理を行った上で、近年の我が国における動向を概観する。そしてこの二つのアプローチについて先行研究の事例比較を行い、精神分析的アプローチの妥当性と独自性を検討することを目的とする。さらに、その結果をもとに精神分析における環境的アプローチの意義について、我が国の心理士へのニーズと照らし合わせて考察を行う。

2. 精神分析における「環境」の位置づけ

(1) 歴史の変遷

精神分析を創始した Freud, S.は、徹底して個人の精神内界を探究した。例えば精神分析で扱う家族は、その個人が内的に保つ家族イメージであり、現実の家族ではない。彼はむしろ自身の経験から、現実の家族は患者の洞察に対して抵抗としてはたらくという点で、治療を妨げる要因になると考えていた (Freud, S., 1912/1987)。

そして Freud, S.の娘である Freud, A.は、1920年代から精神分析の児童への適用を試みた。彼女は子どもが呈する問題と養育環境との関連を重視し、親の治療協力を必須と考えた。時を同じくして Klein, M.が、Freud, A.とは違う方法で児童分析に尽力していた。彼女はいくつかの玩具を用意して子どもが自由に遊ぶのを観察し、象徴的に解釈することが自由連想と同等であり、そこで展開する転移は大人同様であると考えた。ゆえに親がいるところでは子どもが治療者に転移を展開することに抵抗を示すので、親は治療を阻害すると考えた (妙木, 2003)。

また同じ頃、Winnicott, D.W.は個人が単一のものではなく、環境との組み合わせであると強調した。そして幼児にとっての初めての環境は母親であり、環境は発達を促進をも、阻害をもし得ると言った。また Winnicott は、環境論を治療へも適用した。彼は、破壊されることのない治療環境の重要性について言及し (Winnicott, D.W., 1967/1999)、愛情剥奪にある子どもたちの治療において、治療スタッフが子どもたちから受ける情緒的負担に耐え、「生き残る」ためには、十分な職員配置と協働者の支持が必要であると説いた。彼が言及した治療者自身の外的、内的「環境」に関する事柄は、現代精神分析における重要な概念となって受け継がれている。

また Bion, W. (1962) は、Klein の投影同一化の概念を発展させ、コンテインメント理論を創出した。このコンテナー—コンテインドモデルは、クライアントが自ら考えることのできない考え (β 要素)を、投影同一化というコミュニケーションを通じて治療者が象徴化し、感じ、考える機能 (α 機能)を果たすという相互作用を通じて、クライアントが自身について自ら考え、感じるようになるようになっていく過程を説いている。Bionはこの理論を通じて、精神分析におけるクライアントとセラピストの相互作用や、関係の重要性を主張したのである。さらにこの考えは現代精神分析に受け継がれ、精神分析の応用領域の発展に大いに貢献した。

(2) 現代精神分析における環境的アプローチ ～タピストッククリニックの功績より

個人と環境の相互作用に着目する視点は、現代精神分析において、子どもをとりまく家族へ

の支援や、個人を取りまくよりソーシャルな関係—すなわち個人と集団、組織との関係という領域で発展を遂げた。本項ではこれら精神分析の応用領域について、その発展に大きく関わったイギリスのタビストッククリニック（以下 T.C.と略記）の功績を中心に概観する。

T.C.の功績の一つは、子どものケア領域における親面接や、教師等、他職種との協働の充実にある。T.C.の児童家庭部門のセラピストの訓練課程ではそれらについて学ぶことが重視されており、親面接を行うだけでなく、子どものセラピストも定期的に親と話し合ったり、必要に応じて教師と話し合うことも求められる（平井，2009）。

また、Bion はコンテインメントを論じる前に、集団心性に関する一連の研究を行っている。T.C.ではこの Bion のグループ研究と Bick, E.の乳児観察セミナー、さらに Balint, M.の一般開業医向けの、患者—医師関係を改善するためのグループセミナーの蓄積を経て、集団心性や組織と個人との関係について探究が進んだ。

他にも、戦後、T.C.から独立したタビストック人間関係研究所にて大きく発展を遂げた組織コンサルテーションは、組織で働く人たちのメンタルヘルスの向上を目的とした。ここではより社会科学的な理論を重用し、グループの力動と組織特性との関連、無意識的不安への組織的防衛などの研究が進められた。その方法は、コンサルタントが現場の観察と自身の情緒経験の理解を通じ、そこから得た知見を現場に伝えていくという形だった（Mosse, J., 1994/2014）。

T.C.で子どもの心理療法の訓練を創始した Martha, H. は、教師（支援者）と子どもとの関係性を理解するためにワークディスカッションという方法を考案した。このワークディスカッションでは、支援者は職場における他者との関係について、観察者として客観的に、そして同時に当事者として逆転移感情も含めて複眼的な視点で記録し、小グループでのディスカッションを行う（鈴木, 2015）。それは集団内に存在しながら目の前で繰り広げられている場面に関わり、そこで体験することに注意を払い、考えていく訓練となり、日々、過酷な現場で無意識の情緒に翻弄され、気づかなかった現象の意味や影響を理解するようになる（上田, 2016）。この訓練が次項に述べるような実践で生かされるであろうことは、想像するに容易い。

(3) 近年の実践研究

ここでは現代精神分析における環境的アプローチについて、a.子どものケア b.組織コンサルテーションの2領域における事例研究を参照しながら具体的に検討する。

a. 子どものケア

鶴飼（2012）は、T.C.での訓練中に勤めた公的精神保健クリニックでの経験で、母親支援が機能しなかったことで中断した事例を取りあげ、いかに子どもの治療において家族支援が大切かを説いた。そして適宜、多角的なアセスメントを行い、多職種チームによる支援を丁寧に積み重ねていく必要があることを主張した。さらに鶴飼は、母親支援は個人治療ではないので、あくまでも母親として機能するように支えていくことが目標とされることを強調した。この支援を図示すると概ね Figure 1 のようになる。

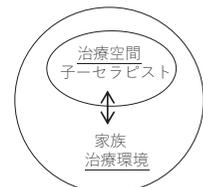


Figure 1. 子どもケアの構造

子どもの治療を取り巻く環境となる家族（外円）をチームで支援することで、子どもの治療（内円）と良い循環（矢印）をもたらす。つまり家族の支援は、うまく機能していなかった子どもを取りまく環境（外円）に直接的にはたらきかける環境的アプローチであると言える。

b. 組織コンサルテーション

Cohn, N. (1994/2014) は、特別なケアを要する乳児病棟での組織コンサルテーションに関する事例研究を行った。彼女は、看護師たちが日々、無力感や怒りが蔓延する病棟に身を置き、同僚との人間関係に悩まされている状況を俯瞰し、この状況は病棟特性ゆえに起こること、ゆえに避けられないことを看護師たちに伝えた。そしてそれらの無意識的情緒に気づき、共有したり表明したりすることの意義を伝えていった。すると看護師たちはよりよい仕事を成し遂げるように変化したと言う。

これを図示すると Figure 2 のようになる。コンサルタントが、看護師自身が気づかなかった病棟特性やそこに蔓延する情緒（外円）に気づくようはたらきかけを行ったことで、看護師に環境との良い相互作用をもたらした（矢印）。またそれと相互に第一次タスク（内円）が達成されていった。即ちこのような支援現場の組織コンサルテーションは、支援を行う個人（事例では看護師）に対し、その個人が自身を取り巻く環境と機能的に相互作用（矢印）できるようはたらきかける環境的アプローチと言える。

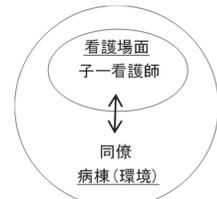


Figure 2. 病棟の構造

ここまで述べてきたように、現代精神分析では個人と環境との相互作用を見据える視座により、環境的なアプローチ特に家族支援やコンサルテーションは発展を遂げた。しかし個人と環境との相互作用に着目すると言え、システムズアプローチのほうがよく知られている。次に、このシステムズアプローチにおける「環境」の位置づけと近年の動向を概観する。

3. システムズアプローチにおける「環境」の位置づけ

(1) 理論的背景と方法

家族療法は1970年代、アメリカの精神保健施策における脱入院化と精神分析の限界が相まって、急速に発展したと言われる。家族の個々人というよりも家族というシステムに焦点化し、問題解決を試みるアプローチである（若島・佐藤・三澤, 2002）。その特徴とも言えるシステム理論は、もともと生物学者の Bertalanffy, L.von. の一般システム理論を基盤とし、援用した。それによると、家族で起きている問題が生じた際、まず個人でなく家族全体に何が起きているか情報収集を行う。そして原因による結果として直線的に考えるのではなく、相互作用の結果であると考え（円環理論）。また、家族システムで問題が生じると、家族はその問題を維持するための悪循環が生じると考える。治療ではそれらの考えをもとに仮説を立て、その悪循環を断ち切り、変化が生じるような介入を行う。

その介入技法は学派や立場によって少しずつ異なるが、大枠は以下のとおりである。治療対象は家族システムとされ、治療者は家族が新しいシステムを獲得するために協力的関係を築くことで、サブメンバーとしてシステムに参入していく。その中で治療者は関与しながら観察を行い、コミュニケーションに関する情報を収集して分析を行う。そして悪循環となっているパターンを仮説として伝えたり、新しいパターンを作っていくための質問や提案を行う。面接を繰り返す中で、時にその仮説は修正されながら治療者による介入が続けられ、変化をもたらす。

これはまさに個人と環境との相互作用に着目し、その相互作用を治療対象とするアプローチである。このアプローチによる成果は、それまで主流だった精神分析の限界、課題を凌駕する

ものとして、臨床家たちに鮮烈な印象を与えた（遊佐，2013）。しかしその後、家族療法家自身が、家族療法家が陥りやすい問題（傲慢さや過信など）を指摘したり、アメリカの家族会からの批判が出たりという事態が起こり、少しずつ理論や技法に修正が加えられていった。

(2) 我が国における近年の動向 ～特に情緒的側面の扱いに着目して

アメリカにおける家族療法の隆盛から10年ほど遅れて、日本にも第一世代の家族療法一すなわち精神分析のアンチテーゼとして誕生したものが持ち込まれた。ここでは個人の感情的側面は取り扱われず、システムやコミュニケーションに徹底して注目していく態度が求められた。吉川（2000）は当時を振り返り、その限界を感じて治療関係を扱うことの必要性を考え始めたと述べている。そして家族療法における心的プロセスについて、治療場面では、情緒的経験に捉われてしまいやすいからこそ扱わないほうが賢明だと述べた上で、しかし家族療法特有の心的プロセスの扱い方として、情緒的コミュニケーションを多層的な家族成員間のコミュニケーションの一環として捉えるありかたを提示している。つまり家族療法では「心」を扱わないのではなく、相互作用の文脈のひとつとして位置づけることで家族療法の立場を守り、「心」に巻き込まれやすい人間としての治療者のありようも見据えていると言える。

他に亀口（1997）は家族の感情の渦は避けきれないものであり、渦を抜け出すには技法や能力でなく、困難な状況にある家族を前に自身の無力さと対峙し、静かに待つ姿勢が必要であった経験について述べている。最近の研究では藤田（2009）が、家族療法における受容・共感のありかたを論じている。すなわち積極的介入があればこそ家族成員の不満が昂じることもあり、それが顕現した時にこそ受容・共感的交流が達成され得ることを述べ、成員のニーズに応じて支持的に関わりながら他の成員を通じて介入するなど、家族療法ならではの受容・共感的態度を洗練させていく必要があると述べている。

このように家族療法は生物学的・行動科学的なサイバネティクスを基盤としたシステム論から、複数の人間が創るシステム系の複雑さ、混沌さに着目したカオス理論へと変遷している。

4. 精神分析的アプローチとシステムズアプローチの比較検討

～コンサルテーション事例を用いて

(1) 目的

本章では環境にはたらきかける家族支援やコンサルテーションにおいて、多くの効果研究が存在するシステムズアプローチ（例えば吉川，2000；黒沢・西田ら，2015など）と量的な効果研究が未だ見当たらない精神分析的アプローチとの比較検討を行うことで、精神分析的アプローチの妥当性や独自性を明らかにすることを目的とする。

(2) 方法

研究方法は、事例比較法（Watson et al., 2007）を用いる。両アプローチの比較をより厳密に行うために、特に家族支援とコンサルテーションに関する先行研究の中でも、論文が発表された年代や実践の場、問題、対象等の条件においてより近いものを選出していった。その結果、多くの共通項が見られた学校における教員へのコンサルテーションを取りあげることとした。この領域の先行研究については、家族療法のシステムズアプローチによるコンサルテーションは中釜（2009）や安田（2015）等の研究がある。また精神分析的アプローチでは祖父江（2009）

やガヴィニオ（2015）等の研究がある。さらにこれらの中でも、①実践の場が小学校であること、②低頻度の巡回型コンサルテーションであること、③問題対象が、発達障害が疑われる児童であることの3つの共通項が見られた丸山（2012）のシステムズコンサルテーション事例と植木田（2016）の精神分析的コンサルテーション事例を取りあげることとした。

(3) 結果と考察

両アプローチの比較項目と要点を Table 1 に示す。比較項目は、コンサルテーションの構造や過程の要点と考えられた勤務頻度、問題、目標、コンサルタントの役割や態度、見立てのポイント、コンサルテーション前もしくは並行して行った仕事、コンサルテーション内容、結末の8項目とした。各項目の要点は事例記述から抽出し、比較した要所を表中の下線にて示した。以下、各項目を比較検討した結果と考察を述べる。なお、文章中はシステムズアプローチを SA、精神分析的アプローチを PA と表記した。

1) 勤務頻度と問題 (Table 1 の①と②)

勤務頻度は、SA は定期的だが PA は不定期で、これは後述するコンサルテーション内容に影響を及ぼす一因になったと考えられる。また、対象児童が抱える問題は概ね共通している。

2) 目標 (Table 1 の③)

SA では子どもをめぐる新しいシステムを作ることを目指し、その中に担任の子ども理解の枠組みの変化や、子ども一教師の関係性の変化が含まれている。一方、PA は同様に、担任に新しい子ども理解の枠組みを提示するが、その目的は教師自身がそれを自ら考えることができるようになることを重視している。ここに各々の独自性が認められる。家族療法家の吉川（2000）は、教職員の援助スキルを向上させるコンサルテーションは、結果的に各事例の障壁を教職員が埋めるという点で教育の専門職の範囲を超えていると言っている。また長期的には有効かもしれないが、実質的な効果は得られないとも言っている。確かに例えば最近、我が国でも報告されている PA のワークディスカッションによる教師への支援（鈴木、2016）は、短期の効果を想定していない。鈴木自身も、学校が危機的な状況にある時はこの方法は用いられない、と限界を言及している。しかし、PA において、短期的な効果を見込んだ助言を全く行わないわけではない。その助言の視座や内容については、5) のコンサルテーション内容の項にて後述する。

3) コンサルタントの役割や態度 (Table 1 の④)

役割については、両アプローチともに対象児童と距離を置くことで第三の視点を持ち、全体（システム）を俯瞰して見るという点が共通している。

しかしコンサルタントの態度は明らかに異なり、PA ではコンサルテーションの場でコンサルタント自身に生じる情緒（逆転移）を通じて、そこに投影されているかもしれない子どもの情緒に想いを巡らせ、吟味した上で見立てに活用する。一方、SA はコンサルタントの情緒的側面については一切触れていない。現代精神分析の、特にクライン派において、逆転移を治療や協働に活用する立場がある。Joan, H. (1983) は虐待支援の協働において、子どもの凄まじい苦しみと痛みの投影を受けることにより、協働者への非難や怒りが治療者に生じるのは自然なことであり、それを否認することで支援が破綻したり停滞したりする危険性を主張した。しかし同時に、逆転移にはその場の状況やそこに在るあらゆる人間関係、さらには各人のパーソナリティ等、実に多くの要因が関与する。ゆえに、分析の構造や設定、さらには契約について細心

Table 1. 両アプローチによるコンサルテーション事例比較

システムズアプローチ(丸山, 2012)		精神分析的アプローチ(植木田, 2016)	
① 勤務頻度	月1回	① 勤務頻度	年に2.3回
② 問題	授業中のパニック(発達障害疑い)	② 問題	授業に集中できない, 教師の話を聴かない, 反抗的態度(発達障害疑い)
③ コンサルテーションの目標	変化を求める硬直したシステムに作用し, 教師と新しい子どもも理解や新たな対応を作り出す作業を行うことで子どもと教師を支援し, 新しい関係性(システム)を作り出す。	③ コンサルテーションの目標	教師が不可解な子どもの言動について自ら考えられるようになるために, 理解の枠組みを示し, 具体的な取り組みへの足掛かりを示す。
④ コンサルタントの役割や態度	問題に関わるシステム内の関係やパターンを把握できるようなメタポジションに位置付き, 特定の相点に固執せず, 新しい現実構成を行う。 コンサルタント自身もシステムの一部となって作用する。	④ コンサルタントの役割や態度	当該生徒に直接支援しないことで距離を置き, またコンサルティイからの情報にのみとらわれず, 問題を見立て, 明確化して共有していく。 生徒と教師がコンサルタントに投影する情緒に対応する逆転移感情に注意を払い続け, それが教員に投影された子どもの情緒である可能性を吟味する。その際, 教員の感じ方によっては子どもの実像と異なる可能性(リスク)を考慮する。
⑤ 見立てのポイント	教師の情報をもとに, 観察によって得た情報を「仮説ストーリー」として修正しながら統合していく。 授業ではどんな場面で子どもがパニックを起こすか注意深く観察し, またコンサルタントと自由に散歩に出た際の様子も観察することで, 場の状況(環境)と本人の反応とのつながりを探り, 本人の問題を見立てる。	⑤ 見立てのポイント	生徒が属する集団全体の雰囲気, 教師と子ども集団の言語ノ非言語的コミュニケーション, そしてその場に置く当該生徒の様子, 当該生徒と教師とのコミュニケーションを注意深く観察し, その観察材料と教師の訴えをもとにその場に生じている関係性を見据えながら問題を見立てる。
⑥ コンサルテーション前もしくは並行して行った仕事	・対象となる子どもの授業観察 ・母親との面接	⑥ コンサルテーション前もしくは並行して行った仕事	・対象となる子どもの授業観察
⑦ コンサルテーション内容	教室で場面変換時や注意された時, 指示にうまく従えない時に泣いてしまう当該生徒と, コンサルタントと散歩に出た際の様子(しつかりした態度; 自分自身のすること, コンサルタントのすることを明確に指示する)から, 自分と相手との間に明確な境界を持つことによって安心できると見立てを伝え, 環境を整えることを助言した。 言語能力の弱さや手先の不器用さも感じられ, 課題の精査を助言した。 親が子どもの問題は担任が原因と思い, 不満を持っている様子から, 親面接と子どもの知能検査を提案。	⑦ コンサルテーション内容	教師にコンサルタントが迫害の対象でないことを明確に伝えた。 教室全体の雰囲気から, 教師には口頭ばかりでなく視覚刺激を用いること, 努力した原直には褒めることを助言した。 また当該生徒については, 教室内での行動(教員の注意を惹きつける行為)と, 生活状況(施設に預けられていること)から, 自分を手放した保護者が再び呼び戻してくれるかが気が気になって授業どころではないのでは, という見立てを伝えた。
⑧ コンサルテーション結果	コンサルタントの助言をすぐに実施, パニックは減少, 助言の効果があつたと報告。 母親と面接し, 了解を得て知能検査を実施。その結果と対応策を教師と母親に伝えたことで, 教師の対応も切り替わり, 母もありがたう思っていると報告あり。	⑧ コンサルテーション結果	明記なし。 (全体考察にて; 一般的に)「自分のやりかたが悪いのではないと勇気をもたらった」「自分たちで何をすべきか, 子どもにも何ができるのかを考える材料をもらった」と言われることが多い。

の注意が払われる。しかしあまりに複雑化した事例や、もしくは危機的な状況にある場合は、逆転移の内容や質を吟味するのに限界がある。PAにおいても同様であるが、支援の頻度や期間、コンサルタントーコンサルティ関係の質等から、逆転移の吟味には、より一層の困難が伴うだろう。コンサルタントがこれら効用と限界を踏まえ、自身の逆転移を支援に生かすことができる状況や事例であるかを検討する、高い専門性が求められると考える。

因みにコンサルテーションを概念化した Caplan, G.は、その原則において、コンサルタントはコンサルティの内面的問題を直接取り扱わないが、コンサルティがクライアントについて自由に話せるように設定し、それをクライアントの投影的素材として理解に活用することを述べている（丹羽，2015）。このことから、PAにおけるコンサルタントの態度は、伝統的なコンサルテーションの原則を踏襲している一面があると言えるだろう。

4) 見立てのポイント（Table 1 の⑤）

見立てについては、綿密な観察と教師との面接により、両アプローチともに場の状況と生徒の反応との関連を見出し、そこから生徒の心理的な問題を見立てており、大きな差異は見られない。コンサルテーションの一般的原則においては、コンサルタントの外部性が原則とされる（高島，2011）ので、ここで見られる共通点はコンサルテーションの普遍的な要素と言える。

5) コンサルテーション前、もしくは並行して行った仕事、コンサルテーション内容と結末（Table 1 の⑥～⑧）

これらには両者の大きな違いが見られる。SAでは見立てを伝えた上で、該当生徒への新たな個別対応を具体的に助言している。さらに母親面接や知能検査という、具体的支援も行っている。しかしPAでは、同様に見立ては伝えるものの、該当生徒に関する助言ではなく、生徒集団、すなわちその場全体にはたらきかけるための助言を行っている。さらに勤務頻度の違いもあるだろうが、それ以上の具体的支援は行っていない。このような違いについて、教師はどのように捉えているのだろうか。PAの考察には、教師の評価に関する記述がない。

小林（2009）は学校コンサルテーションについて、500名余りの教員にニーズを問い、200名余りの支援者に実施内容を尋ねた研究で、両者の間に齟齬があったことを報告している。教員のニーズは子どもの問題に対し、具体的にどのように対応していくかを考えていくことにあったのに対し、支援者はそれよりも子どもの問題についての情報収集をしたり、一緒にアセスメントを行ったりしていた。

PAでは、目的のところでも述べたように、教師が主体的に子どものころのありように想いを巡らせ、考え、はたらきかけ続けるようになることを目指している。ここに精神分析の独自性が認められるが、同時に教師のニーズとの間に齟齬が生じる可能性が危惧される。ここで一般的なコンサルテーションの原則に翻ってみると、問題解決のアセスメントを行い、計画を立案し、実施していく過程はあくまでも二者の対等な話し合いによってなされ（丹羽，2015）、コンサルティが主体的に戦略を選択するまで待たねばならない（高島，2011）。このようなコンサルティの主体性は、むしろPAのほうが尊重する姿勢を持つ。本稿で示した事例研究では、SA、PAともに「どのように」支援内容が呈示され、協議されたかについての記述がない。大切なことは、コンサルタントがまず、支援の目的や内容をコンサルティに適切に呈示し、その際、さらにその後の実施過程においても、二者が対等に、自由に協議できることであると考察される。

6) まとめ

以上の比較から、両者ともに環境と個人との相互作用に着目するという共通点を持ちながらも、PAの独自性が明らかとなった。それは①コンサルティが自ら考える主体性を重視する②コンサルタントの情緒(逆転移)を支援に活かす③「場」の力動を見立て、介入(助言)する④直接的・具体的支援を控えるの4点に集約される。同時に、基本的に即効性を目論んでいないという限界や、コンサルタントに高い専門性が求められるという問題、支援が直接的・具体的でない点でコンサルティのニーズと齟齬が生じる危惧が考察された。また、これらの特徴が伝統的、一般的なコンサルテーションの特性を有すること、さらにはSAと共通して見られた特性においても、コンサルテーションの普遍性が確認されたことから、PAにある一定の妥当性が認められると言ってよいだろう。

次章では、これら独自性が今日の心理臨床においてどのような意義を持つのか、また課題や限界を踏まえた上での、PAを実践に生かすための条件についてさらに考察する。

5. 考察 ～現代精神分析における環境的アプローチの心理臨床への貢献

これまで述べてきたように、精神分析における環境的アプローチはいずれもFigure 3のような構造を持つ。前章で比較したシステムズアプローチもこれと同じ構造を持つが、図中に示される矢印の質に関する着眼点と介入の違いが明確にあった。

本稿でこれまで見てきた環境的アプローチの独自性と限界を踏まえ、筆者はこのアプローチの今日的意義について特に、支援者が自身の情緒(逆転移)を通じて、対象者であるクライアントだけでなく環境—クライアントの家族や協働者、支援者が身を置く場(組織)と交流するという点に注目したい。

精神分析的な立場では、環境は個人の内的世界の投影を含む視点を持つ。ゆえに各人にとって、環境は全く同じように捉えられるのではなく、各々、異なる独自のものとして認識される。狩野(2009)は病棟での多職種チーム協働において、スタッフは各々が無意識的に理想的なチームを投影し、それを強く保持していることに言及している。しかしその理想は協働過程で破棄せざるを得なくなり、チームは分裂と統合、崩壊と組織化を繰り返すことで発展すると言っている。また、平井(2011)は、特に子どもの心理療法では、子どもとセラピストだけでは支援が成立し得ず、親や学校との協働関係という大きな器の中に成立することを述べている。これらの見解はいずれも、各人の投影を引き受ける器としての環境と支援者が、無意識的情緒を通じて「交流すること」について述べられている。

Winnicott, D.W. (1968)は、赤ん坊が母親という安全で支持的な環境に抱えられると、やがて双方向的な相互作用の時期へと向かうことを述べている。この時、赤ん坊は母親と愛情や攻撃性を通して「関係」し、母親が報復したり無視したりすることなくその過程を「生き残る」ことができれば、赤ん坊は生き残った母親を投影の外に現実的に位置づけるようになる。そして赤ん坊は、創造的にいきいきと生きることができるようになる。この理論は、治療論にも援用されている。これを環境的アプローチの文脈で考えると、支援者は、愛情や攻撃性といった



Figure 3. 環境的アプローチの構造

無意識的情緒を通して環境と相互に交流する経験を経て、投影に彩られていた環境を現実的に認識するようになり、創造的な支援が実現すると考えることができるのではないだろうか。

筆者は、とりわけ過酷な現場で協働やコンサルテーションが求められる今日の心理臨床において、環境的アプローチが貢献し得る可能性は大きいと考える。なぜなら、その現場において支援者は、クライアントだけでなく同僚、組織との関係において生じる不安や苦痛を、決して避けられないという事実があるからである。既述したとおり、家族療法においても治療者の情緒について議論され始めていることを考えれば、環境的アプローチが持つ視座の意義が認められると言えるだろう。しかし同時にこのアプローチが実践に貢献し得るためには、いくつかの条件があると考える。それらについて次に述べる。

まず、環境に対して支援者（の心的姿勢）が開かれていることである。Menzies, I.E.P. (1960) は対人援助サービスの現場では、渦巻く不安や苦痛を防衛する仕事のやりかたや人間関係が、組織的に形づくられることを述べている。支援者はこの防衛にしっかりと取り組み、衝突や回避を恐れずに交流する（話し合う）ことが必要だろう。そのためには、組織心性や集団力学について学んでおくことが重要であると考えられる。なぜなら支援者は環境と交流することを通して、報復の衝動に駆られたり、極端な形で破壊してしまったりする可能性があるからである。環境を俯瞰して観察する視点は、交流を通して生き残る過程で欠かせない要素となる。現在、心理士の養成課程において、知識的にも経験的にも集団心性を学ぶ機会は少ない。しかし、昨今、心理士は組織の一員として求められる役割が大きくなり、この領域の学びは必須であると考えられる。

また、実践における精神分析的視点の提示は各人の感受性を高め、心理的プロセスの洞察を深めるが、同時にそれに伴うリスクを想定する必要がある。Mosse, J. (1994) は精神分析的な組織コンサルテーションの提供において、感受性が高められたことでメンバー間の軋轢が倍加する可能性を述べている。また、組織の意識的なタスクを軽視し、組織や個々のメンバーの病理として捉えるリスクについても述べている。このリスクを常に想定し、組織的防衛に捉われずに観察する態度や、観察した素材について考え続けることが欠かせない。そしてその実現においては、支援者自身がスーパーヴィジョン等の訓練を受け続けることが必須となるであろう。

最後に本稿の限界と課題について述べる。本稿では先行研究を概観、比較することで、精神分析的な環境的アプローチの独自性を抽出し、その中でも支援者と環境との情緒的交流に着目して今日的意義を考察した。しかし、実際の交流（言語、非言語的コミュニケーション）の詳細については、先行研究による事例比較法という方法論的限界から、十分に検討し得なかった。今後は筆者の自験例をもとに、追究していくことを課題とする。

また、精神分析的アプローチが支援者自身の逆転移や対象者の無意識的な傷つき、不安、失望といった情緒を扱うため、その適用条件は徹底して留意されるべきであることは既に述べてきたとおりである。他にも、支援を開始する前に行う対象者への丁寧な説明と協議、同意といったインフォームドコンセントのありかたや、適用ケースの選定、リスクマネジメントを含めた適用の状況、技法上の工夫等、様々な条件が想定されるが、それらについては紙面の都合上、十分に検討し得なかった。今後、精神分析的なアプローチが真に心理臨床に役立つものとなり得るには、これら契約のありかたや適用の条件について十分な検討が必要であると考えられる。

註

- 1). 心理臨床大辞典では環境療法（国分，1997）を「（支援者が）集団内の人間関係や組織運営を修正すれば，各個人の変容が生じると紹介しており，本稿の「環境的アプローチ」のように，支援者が集団や組織と「情緒的に交流する」視点が含まれていない点で意味合いが異なる。
- 2). この点で「コミュニティアプローチ」とは異なる。

文献

- Bion, W. (1962). *Learning from Experience*. Karnac Books, London. [福本修（訳）（1999）. 経験から学ぶこと. 福本修（監訳）精神分析の方法Ⅰ. 法政大学出版社.]
- Cohn, N. (1994). *Attending to Emotional Issues on a Special Care Baby Unit*. The Unconscious at Work; Individual and Organizational Stress in the Human Service. Obholzer, A. and Zagier, R. V. (eds.) pp60-66. Routledge, London. [郷良淳子（訳）（2014）. 乳児特別ケアユニットにおける感情の問題に向き合う. 武井麻子（監訳）組織のストレスとコンサルテーション. 金剛出版.]
- Freud, S. (1912). *Ratschlage für den. Arzt bei der psychoanalytischen Behandlung*. [小此木啓吾（訳）（1987）. 分析医に対する分析治療上の注意. フロイト著作集 9 技法編・症例編. 人文書院.]
- 藤田博康（2009）. スクールカウンセリング実践において個人療法と家族療法をつなぐもの一共通感，介入，変化の新たな位置づけ. 心理臨床学研究, 27(4), 385-396.
- ガヴィニオ重利子（2016）. 中学校における精神分析的志向を持つカウンセリングの意義. 平井正三・上田順一（編）学校臨床に役立つ精神分析. pp101-128. 誠信書房.
- 平井正三（2009）. 子どもの精神分析的な心理療法の経験. 金剛出版.
- 平井正三（2011）. 精神分析的な心理療法と象徴化. 岩崎学術出版社.
- Joan, H. (1983). *Thinking Together about Children in Care*. Psychotherapy with Severely Deprived Children. Mary Boston, Rolene Szur (eds.) pp110-117. Karnac Books, London. [上村宏樹（訳）（2006）. 公的保護の下にある子どもたちについて共に考える. 平井正三・鶴飼奈津子・西村富士子（監訳）被虐待児の精神分析的な心理療法. 金剛出版.]
- 亀口憲治（1997）. 現代家族への臨床的接近. ミネルヴァ書房.
- 狩野力八郎（2009）. 方法としての治療構造論. 金剛出版.
- 小林明子（2009）. 子どもの問題を解決するための教師へのコンサルテーションに関する研究. ナカニシヤ出版.
- 国分久子（1997）. 環境療法. 氏原寛ら（編）心理臨床大辞典. pp407-409. 培風館.
- 黒沢幸子・西野明樹・鶴田芳映・森俊夫（2015）. 事例とコンサルティを活かす解決志向グループセラピーのコンサルテーション. コミュニティ心理学研究, 18(2), 186-204.
- 丸山広人（2012）. 巡回相談としてのスクールカウンセリングの試み：小学校におけるシステムズコンサルテーションによって効果を高めるために. 心理臨床学研究, 30(3), 298-308.
- Menzies, I.E.P. (1960). *Social Systems as a Defense against Anxiety*. Trist and H.Murry(eds) (1990). The social Engagement of Social Science. Free Association Books, London.
- Mosse, J. (1994). *Introduction. The Unconscious at Work; Individual and Organizational Stress in the*

- Human Service*. A, Obhlzer. & V, Roberts. (eds.) pp1-10. Routledge, London. [武井麻子 (訳) (2014). はじめに. 武井麻子 (監訳) 組織のストレスとコンサルテーション. 金剛出版.]
- 妙木浩之 (2003). アンナ・フロイトとメラニー・クラインの間で. 妙木浩之 (編) 現代のエスプリ別冊ウィニコットの世界. pp105-124. 至文堂.
- 中釜洋子 (2009). 保護者とどう付き合うか. 子どもの心と学校臨床, 1(1), 23-31.
- 丹羽郁夫 (2015). ジェラルド・キャプランのメンタルヘルス・コンサルテーションの概観. コミュニティ心理学研究, 18(2), 160-174.
- 祖父江典人 (2009). 転移と逆転移の観点から教師へのコンサルテーションを考える. 子どもの心と学校臨床, 1(1), 60-68.
- 鈴木 誠 (2015). ワークディスカッション. 岩崎学術出版社.
- 鈴木 誠 (2016). 教職員チームへの支援—ワークディスカッションという方法. 平井正三・上田順一 (編) 学校臨床に役立つ精神分析. pp188-206. 誠信書房.
- 高島克子 (2011). コミュニティアプローチ. 東京大学出版会.
- 植木田潤 (2016). 教室にいる発達障害のある子どもと教員を支援する. 平井正三・上田順一 (編) 学校臨床に役立つ精神分析. pp80-100. 誠信書房.
- 上田順一 (2016). 学校現場に精神分析的観点を育む. 平井正三・上田順一 (編) 学校臨床に役立つ精神分析. pp207-223. 誠信書房.
- 鵜飼奈津子 (2012). 子どもの精神分析的な心理療法の応用. 誠信書房.
- 若島孔文・佐藤宏平・三澤文紀 (2002). 家族療法から短期療法, そして物語療法へ. 長谷川啓三・若島孔文 (編) 事例で学ぶ家族療法・短期療法・物語療法. 金子書房.
- Watson, J.C., Goldman, R.H., Greenberg, L.S. (2007). *Case Studies in Emotion-Focused Treatment of Depression: A Comparison of Good and Poor Outcome*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Winnicott, D.W. (1949). *Hate in the Countertransference*. IJP, 30, 69-74. [中村留貴子 (訳) (2005). 逆転移における憎しみ. 北山修 (監訳) 小児分析から精神分析へ. pp194-203. 岩崎学術出版社.]
- Winnicott, D.W. (1967). *Delinquency as a Sign of Hope*. Prison Service Journal, 7/27. [井原成男 他 (訳) (1999). 希望のサインとしての非行. 牛島定信 (監訳) 家庭から社会へ. pp90-100. 岩崎学術出版社.]
- Winnicott, D.W. (1968). *The Use of an Object and Relating through Identification*. IJP, 51, 711-716. [橋本雅雄 (訳) (2005). 対象の使用と同一化を通して関わること. 遊ぶことと現実. pp121-134. 岩崎学術出版社.]
- 吉川 悟 (2000). 学校精神保健のサポート方法としてのシステムズ・コンサルテーション. 家族療法研究, 17(3), 238-247.
- 遊佐安一郎 (2013). 家族療法の歴史を構成してみる. 家族療法研究, 30(3), 237-242.

(臨床実践指導学講座 博士後期課程 3 回生)

(受稿 2016 年 9 月 3 日、改稿 2016 年 11 月 30 日、受理 2016 年 12 月 26 日)

現代精神分析における環境的アプローチをめぐる一考察

—システムズアプローチによるコンサルテーションとの比較から—

長谷 綾子

本稿では現代精神分析において、クライアントをとりまく環境を支援したり、セラピストをとりまく環境を支援に活用するアプローチを環境的アプローチと呼び、その今日的意義について考察することを目的とした。まず精神分析における「環境」の位置づけの歴史を概観し、近年の研究動向を整理した。そしてシステムズアプローチによるコンサルテーションと比較検討を行い、精神分析における環境的アプローチの妥当性、独自性を確認した。その結果、妥当性はほぼ支持され、独自性は、支援者が自身の無意識的情緒を手がかりとしながら、被支援者の主体性を重んじる態度にあることが明らかとなった。さらに支援者がクライアントだけでなく、環境となる協働者や組織の特性を理解し、交流することの意義について考察し、今日の心理臨床に貢献するためのいくつかの条件を提示した。

Environmental Approaches in Modern Psychoanalysis:

Comparison with Systems Approach-based Consultation

HASE Ayako

In modern psychoanalysis, environmental approaches include supporting the environment of the client and utilization of the therapist's environment. The present study examined the significance of these approaches in modern times. The history of the positioning of "environments" in psychoanalysis was examined, and recent trends in relevant studies were reviewed. The validity and uniqueness of environmental approaches in psychoanalysis were then examined by comparison with consultation services using system-based approaches. The validity was established. In addition, the approaches were unique in that the support providers placed emphasis on the independence of the support recipients, utilizing their own unconscious emotions. The study also discussed the significance of a supporter's understanding of the characteristics of not only the client but also the environment, including cooperators and organizations, and interacting with them, as well as presenting some conditions to contribute to clinical psychology in modern times.

キーワード： 環境的アプローチ, 現代精神分析, 環境との交流

Keywords: Environmental approach, Modern psychoanalysis, interacting with environments

